

群舞における参加者に対する寛容さ
ー阿波踊り・三原やっさ踊りに参加する
企業チーム*の比較を通してー
お茶の水女子大学大学院
中村まい

1. 背景と目的

1992年のおまつり法制定以降、民俗芸能は観光資源化が正当化され、無形民俗文化財という称号が観光資源化に流用されているという指摘もある(橋本 2016)。さらに、2017年6月の文化芸術基本法改正では観光・まちづくりなどの諸分野への文化芸術の活用が推進されており、経済的な有用性によって文化芸術の価値が評価される恐れがある。経済的な指標によらない、社会的な価値を明らかにすることが求められる。

徳島市の阿波踊りに参加する企業連は、企業活動に関する縁で結ばれた多様な人々(従業員、従業員の家族、顧客や関連企業の従業員)で構成される踊り集団である。踊りの練度を上げることより参加することが重視され、練習に対する「寛容さ」が見られる。それによって企業連は参加者の縁を結び直す契機として機能している(中村 2019)。どのような参加者も受け入れる「寛容さ」が参加者の多様性を生み、縁の醸成に寄与していると考えられる。

神楽や田楽など神事・祭事に付随する民俗芸能では踊り手が青年や少女などに限定される場合や、芸能の稽古の段階から禊などの準備が必要とされる場合がある。一方、盆踊りには元来、老若男女誰でも気安く踊れるという気風が備わっていると言われる。盆踊りは死者や祖先の供養という宗教的な一面もありながら、農村における最大の娯楽であり、民衆のエネルギーを発散させる場でもあった。

一方、地域振興のために催される踊りのフェスティバルでは参加者の参加を促し鼓舞するために踊りの審査を行うものが見受けられる。盆踊りである三原やっさ踊りもその一つである。群舞における集団での統一美は鑑賞者を魅了する一要素である。「魅せる」演舞のためには群舞の練習が必須であり、参加者に対する寛容性は演舞の質と相反すると考えられる。審査が加わることで盆踊りの「寛容さ」に変化は見られるのだろうか。

本研究では民俗芸能の実演に関わる担い手である企業チームに着目し、舞踊・祭りの特性が参加者を受け入れる寛容さにどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的とする。

2. 方法

本研究は盆踊りである阿波踊り、三原やっさ踊りに関する文献調査と、両踊りに参加した企業チームへの質問紙調査によって分析・考察を行う。

文献調査では阿波踊り、三原やっさ踊りの祭り運営形態、踊りの特徴について比較を行い、共通点・相違点を抽出する。

次に、阿波踊りと三原やっさ踊りに参加する企業チームに対して運営に関する質問紙調査を行い、参加者の構成や練習実態を把握する。

3. 結果と考察

1). 阿波踊りと三原やっさ踊りの概要

阿波踊り、三原やっさ踊りは風流系芸能の盆踊りに属しており、400年以上の長い歴史を有する民俗芸能である。共に踊りは行列行進型であり、基本の短い動作を繰り返すため見よう見まねで参加することが可能である。伴奏音楽がハイヤ節系統であり生伴奏の演奏者が同行する点も共通している。他にも、元は各々好き勝手に踊っていた乱舞でありながら1970~80年代に踊り方の統一化が行なわれたことなどの共通点が見られた。

相違点として、三原やっさ踊りは男女で踊り方の区別がないが、阿波踊りには男踊り、女踊り、奴踊りなど踊り方に幾つかの種類があること、三原やっさ踊りはコンテスト形式だが、阿波踊りには審査がないことなどが挙げられる。

踊りの審査があることで、入賞を狙うチームでは一定程度の練習量を確保することが必要になってくる。また、入賞を狙うことによって練習への意識が高まり、参加者のモチベーション継続に寄与している可能性もある。

2). 企業チームの参加者に対する意識

2019年度の徳島市阿波踊りと三原やっさ踊りに参加した企業(企業数は阿波踊り:78、三原やっさ踊り:22)を対象に、企業チームの運営に関する質問紙調査を行った。回答は企業チーム運営担当者に依頼し、郵送法によって配布・回収を行った。

阿波踊りに参加した54社の回答に基づくと、練習なしの当日飛び入り参加者の許容が見られ、踊りの質より多くの人が参加することを重視している傾向が見られた。

一方、三原やっさ踊りの歴代大賞チームには企業や医療法人、官公庁の名前が見受けられる。彼らがどのようにモチベーションを継続し、また参加者確保のために「寛容さ」をどのように用いているのか、阿波踊りの企業連と比較し論じていく。

※本研究では阿波踊りの企業連や三原やっさ踊りの企業会を含む、企業が組織して出演する踊り集団を指して企業チームと称する。

主要参考文献

大森 恵子 (1992) 『念仏芸能と御霊信仰』 名著出版。
川内 由子 (2006) 『阿波踊り』と『三原やっさ踊り』の相関性・相違性--踊る側からのアプローチ『表現文化研究』6(2), pp.141-153.